

高校に聞く!

コロナ禍においても 海外に出たいという意欲は変わらない

本校は普通科と外国語科の2学科を設置する高校です。外国語科には英語コースに加え、韓国語やベトナム語、インドネシア語などの「近隣語各コース」を設けており、多様な外国語教育を特色としています。国際交流活動にも力を入れてきたため、新型コロナウイルスの感染拡大によって海外との交流が全て断ち切られたときは、教育全般に大きな打撃を受けました。しかし、今は人的交流の再開に加え、オンラインの活用でこれまで以上に国際交流活動を活性化させることができている。

本校の場合、コロナ禍以前から外国語科を中心に、多くの生徒が海外大学や国内の国際系学部に進学していました。コロナ禍以降、海外に渡航できるかどうかの先行きが不透明な状況になっても、進学目的が明確な生徒の志望意欲は衰えていないように感じます。実際に2021年3月の卒業生は、韓国、中国、タイ、マレーシアなど、7か国の海外大学に33人が合格。うち28人が進学しています。2022年の卒業生に関しては、その倍の人数が海外大進学を希望しています。

このようにコロナ禍でも「海外に出たい」と考えている生徒は少なくありません。こうした生徒は逆境に置かれているからこそ、海外で学ぶ目的が磨かれ、保護者を説得する言葉を持っています。「語学、国際系の学部は学生募集が厳しい」という話を大学関係者から耳にしますが、まずは目的が明確な彼らの期待に応える教育プログラムをしっかりと整えることが、先決なのではないでしょうか。

一方で、「語学や国際系の学びに興味はあるが、具体的に学びたいことがはっきりしていない」という生徒の場合、コロナ禍をきっかけに志望を変更してしまうケースも見られます。こうした生徒に対しては、彼らにも届く情報、例えば今はぼんやりとしている将来像を明確にイメージできるような情報の提供が大切です。本校でも中学生向けの学校説明会を開催しますが、語学検定試験の合格率などで客観的に教育成果を

グローバル志向を持つ高校生が大学に求めるものとは？ —— 高校生の高い目的意識に応える教育を

関東国際高校 副校長
黒澤 真爾

くろさわしんじ ● 1989年韓国嶺南大学大学院修士課程修了。アジア学生文化協会アジアセミナー韓国語主任等を経て、2013年より現職。



示すとともに、コロナ禍でも学びを止めなかった生徒が語る体験談等を通じて、興味のあることを学ぶ楽しさや充実感などを伝える工夫をしています。

オンラインによる国際交流が増え 社会課題に対する関心が高まる

本校では今、語学の授業の中に海外の高校とのオンライン交流を取り入れています。オンラインでの会話では、対面の時と比べて身振り手振りや間のとり方といった非言語のコミュニケーションを通して伝えられる情報が少なくなるため、生徒に確かな語学力を身に付けさせる必要性を感じています。また、歓迎行事的な交流とは違って、「今起きている問題を、今話したい」という意識が強く、少子化が進む韓国の高校生からは、「少子高齢化についてどう思うか?」、オーストラリアの高校生からは「COP26についてどう感じたか?」といった質問が出ます。本校の生徒も、こうした投げかけに触発され、最新の国際ニュースに関心を持つようになっていきます。

今後、オンラインで日本の高校生が海外の高校生とつながる機会が多くなれば、国際的な視野で社会課題に関心を持つ高校生が増えていくでしょう。大学には、高校での海外交流体験を進展させ、語学を生かして海外の学生と協働でグローバルイシューの解決に取り組む学修機会の提供を期待します。

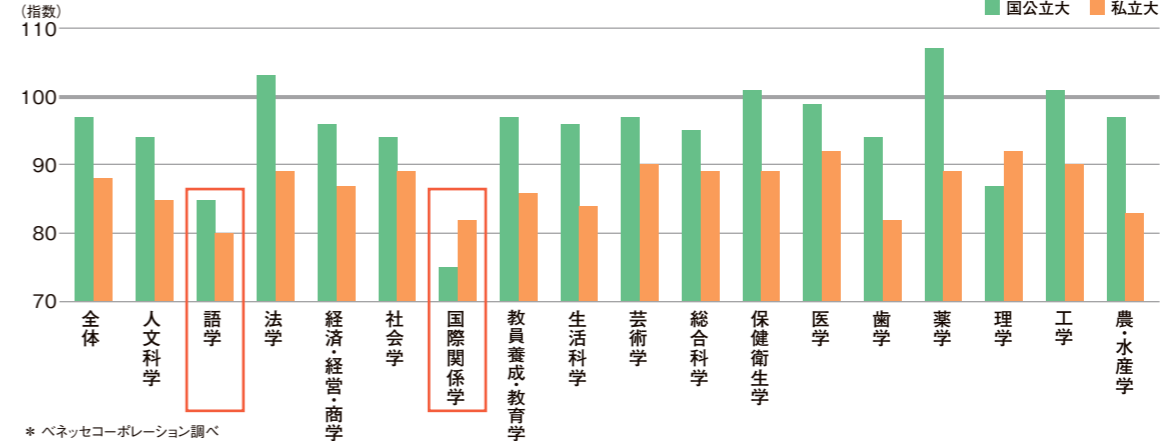
また、高校時代に英語以外の言語を自ら学ぶような生徒は、高い学習意欲を持っています。本校も実施している高校生向けの韓国語検定は、約60校から2000人ほどの生徒が受験します。こうした生徒が高校で学んだ多様な言語の力を生かし、大学に進学できるような道もつくっていただければと思います。

【図表3】関東国際高校の海外大学の合格・進学実績(2021年度)

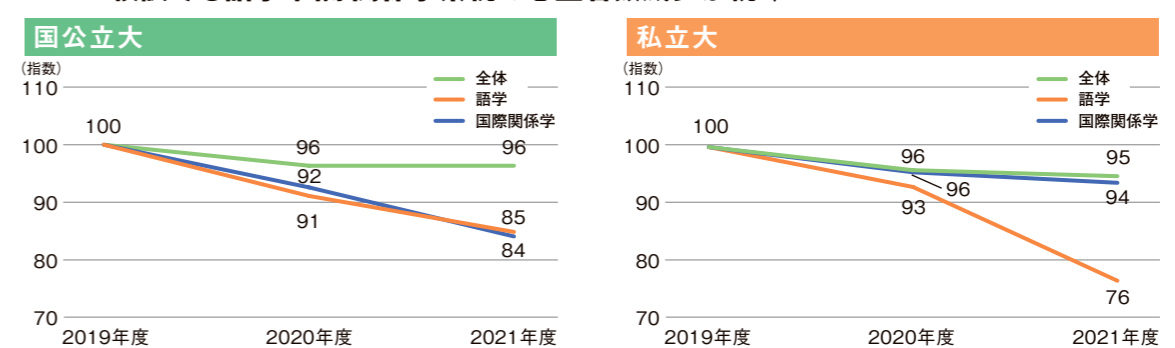
合格者数 33人 進学者数 28人	主な 進学先	韓国	延世大学、韓国外国語大学、高麗大学ほか	マレーシア	サンウェイ大学
		中国	清華大学、同済大学	カナダ	アタバスカ大学、カルガリー大学ほか
		台湾	国立台北大学、淡江大学ほか	アメリカ	ハワイ大学マノア校、ハワイバシフィック大学、アーカンソー州立大学ほか
		タイ	ランシット大学		

【図表1】語学・国際関係学系統の志願者数が大幅に減少

～2021年度入試での学問系統別志願者数の対前年指数(前年の志願者数を100としたもの)



【図表2】模試でも語学・国際関係学系統の志望者数減少が続く～志望者指数の3か年推移グラフ



2021年度入試では、コロナ禍の影響を受けて語学・国際関係学系統の志願者数が大幅に減少した【図表1】。本年度の模試の志望動向を見ても【図表2】、国公立大では全体と比べて語学・国際関係学系統の減少が顕著で、私立大でも語学は大きく減少している。私立大の国際関係学がさほど減少していないのは、学部新設による延べ志望者数の増加が理由だと考えられる。2022年度入試でも厳しい状況は続くだろう。

語学・国際関係学系統の志望者数の減少について、進路指導を担当する高校教員に話を聞くと、「在学中の留学が困難なこと」「ホテル・観光業界が深刻な打撃を受けており、就職に不安を感じる」と「大きな要因だと言う。言い換えれば、「在学中に海外に留学し、その経験を生かして就職する」ということが、これまでの高校生の期待であったのだ。進学しても留学に行けるかどうか、卒業後に想定し

ていた就職先の採用があるかどうか不明になってしまった。今、高校生は「4年間、大学で何を学ぶのか」がイメージしにくくなっているようだ。

一方、コロナ禍のニュースが毎日のように報道され、世界の中の日本を意識する場面は多くなっている。加えて、高校では探究学習等がSDGsについて考える機会が増えており、気候変動など世界共通の課題への関心も高まっている。こうした高校生の意識の変化を学生募集に十分に生かし切れないことに、本質的な問題があるのではないだろうか。

これまで語学・国際関係学系統学部の強みは、「留学」という大きな成長をもたらす学修プロセスと、「語学力」「海外体験」というアピールしやすい学修成果だった。今後はそれだけでなく、DPの実現度で自学の教育力を示す必要があるだろう。教育の充実を図り、学修成果の可視化を進めて、幅広い学びの魅力と、社会での多様な活躍の可能性を、高校生に伝えることが重要だと言える。

REPORT

学生募集から考えるグローバル教育の今後